

■全国優秀賞・山形県知事賞■

たん生日プレゼントはしんまい

鶴岡市立朝日小学校一年 伊藤 風牙

九月二十七日は、ぼくの七さいのたん生日です。ことは、おじいちゃんとおばあちゃんがぴかぴかのしんまいでごはんをたいてくれました。ことしのおこめは、ぼくも手つだつてつくったはじめてのおこめです。

はるには田うえを手つだいました。おじいちゃんといっしょに田うえきにつて、なえがちゃんとうえてあるかみました。おじいちゃんは田うえをするまえにいろいろなじゅんびをしていました。まずなえをつくるそねに土をいれて、たねをまいていました。

「あしやこしがいたい。」
といいながら、大きなあせをながしてがんばっています。それから田んぼをトラクターでおこして、しろかきをしていました。そして大きくなったなえをうえていました。

ぼくがなつやすみであそんでいるときも、おじいちゃんはお田んぼのみずのみまわりや、くさかりきでくさとりをしています。

あきになって、ちいさかったいねがこがねいろのいねになりました。いよいよぼくのでばんです。おじいちゃんといっしょにコンバインにつて、いねかりを手つだいました。コンバインにつているおじいちゃんのかおは、いつもとちがうしんけんなおでした。

おじいちゃんはぼくのたん生日にしんまいをたべさせたいと、おばあちゃんとなん日もかけていねかりをがんばつてくれました。できたばかりのしんまいは、ぴかぴかにひかつていて、いいかおりがして、とてもおいしかったです。おじいちゃんは、

「ふうがが、うめつていうのが一ばんうれしぐで、まだがんばつてこめをつぐらいる。」
といっていました。おじいちゃん、おばあちゃん、おいしいおこめをありがとう。おじいちゃん、ぼくが大きくなつたら、ぼくがつくつたおいしいおこめをたべさせるから、それまでげんきでいてね。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

ぼくのおじいちゃんのおこめづくり
いぬいね

山形市立千歳小学校一年 佐竹 巧

ぼくのおじいちゃんはおこめをつくっています。だから、ぼくもおてつだいをします。

はるになるとたおこしをします。トラクターでつちをかきまぜると、つちのにおいがしました。ふゆのあいだねているつちが、かきまぜられて目をさましたみたいです。五月になると、たうえをします。たうえきにのせてもらうと、みどりいろのなえがかぜにふかれておどっているみたいできれいでした。みずのなかには、かえるのたまごもあつておもしろいです。

あきになると、たのしみにしていたいねかりです。たんぼにいつてみると、きいろいいねにおこめがいつぱいなつておじぎしているみたいでした。かぜがふくと、

サーつとおとがして、みんなでうたっているみたいです。ぼくは、いつぱいごはんがたべられそうだなあとうきうきしました。はじめは、コンバインにのせてもらって、どんだいねかりをしました。コンバインでかつて、のこつたところをぼくがかまでちようせんしました。

「こつもつて、ねもとのほうをかるんだよ。」と、おじいちゃんにおしえてもらいながらやつてみました。かまでいねをかるるとザクザクといいおとがして、たのしくなりました。それに、いなごがいつぱいいました。へびやへびのぬけがらもみつめました。みつけたときはびつくりしたけど、みんなにもみせたいなあとおもいました。

おじいちゃんをつくつたおこめはとてもおいしいです。だいすきです。おべんとうの日はおかあさんがキャラベんをつくつてくれます。ごはんがいろんなかおやかたちのおにぎりにへんしんしてたのしいです。ますますごはんがおいしくなります。

おこめをつくるのはたいへんだけど、大きくなつたらおじいちゃんみたいにおいしいおこめをいつぱいつくりたいです。

■全国優秀賞・山形県知事賞■

ご飯粒、のこすなよ。

山形市立西小学校六年 井上 瑞貴

平成二十二年十月、山形県がほこるブランド米「つや姫」の販売にわく頃の出来事です。その年の五月、数年前から体の具合が悪かったじいちゃんが、家族の説得でやっと重い腰を上げて、病院へ行く決心がつかしました。病院のそばには、どこまでも田んぼが広がっていて、丁度じいちゃんと同じくらいの農家の方が、水を引いた田んぼで田植えに追われていました。その日の診察で、じいちゃんは「末期ガン」と診断されました。そのまま入院をしたじいちゃんは、再検査と手術でお腹の中を空っぽにするために、大好きなご飯を食べることができなくなりしました。六時間以上かかった手術に耐えたじいちゃんは、数日後に大好きなご飯の病院食を少しずつ食べられるようになりました。

「やっぱり白いご飯はうまいなあ。」

と、じいちゃんは病室の窓から見える黄緑色の田んぼながめながら言いました。

七月の初め、あまり体調が良くなかったのですが、じいちゃんは退院しました。車の中から、真っ直ぐ空に向かい成長した稲を見たじいちゃんは

「ずいぶん稲ものびたなあ。」

と、つぶやきました。

その夜、お寿司を囲んで、じいちゃんの退院を喜びました。その席で、じいちゃんは

「みなさんにはご心配をおかけいたしましたして申し訳ございませんでした。そして本当にありがとうございます。」

と、敬語で言いました。

「私のじいちゃんなのに、なんだか他人みたいだなあ。」と、思いました。そして私は完全にじいちゃんの病気が治ったと、信じきっていました。ところが、九月になり体のむくみがひどくなり、さっぱり食欲のないじいちゃんは、歩くこともできなくなり、また入院してしまいました。もう田んぼは黄金色に光りはじめていました。それから間もなくの十月の体育の日、じいちゃんは静かに

天国へ旅立ちました。稲刈りの終わったばかりの田んぼ道、じいちゃんは無言の帰宅をしました。家に帰って来たじいちゃんの枕飯に、炊きたての新米のつや姫をあげました。白いご飯が大好きだったじいちゃんは、新米のつや姫のあったかいご飯をどれだけ食べたかったことでしょう。私は体が元気で、なんでもおいしく食べられる幸せをこの時初めて知りました。

また今年も新米の季節がやってきます。一番最初にじいちゃんの仏壇に炊きたてのつや姫をお供えしたいです。昭和五年生まれの、物を大切にした、やさしいじいちゃん。

「ご飯粒、のごすなよ。」
今でもじいちゃんの口ぐせが、どこからか聞こえてきそうです。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

「いのち」を育てる

農家に生まれて

庄内町立立川小学校六年 笹本 悠奈

わたしたちの家は農家で、お米を作っています。毎年、わたしたちの家族は、おいしいお米を作るために、朝早くから夜おそくまで一生けん命に稲の世話をします。中でも楽しみな季節は春と秋です。

春には田植えをします。わたしの家に親せきの人がたくさん集まってきて、朝早くからみんなで作業が始まります。

「よいしょ。落とさないように気をつけて。」

最初は、育苗器から苗箱を運びます。ちよつとだけ芽を出した苗は、きれいな黄緑色で、かわいらしい赤ちゃんのようです。

「はい。はい。」

約二十人の家族、親せきが一行に並んで、まるでバケツリレーのように、苗箱を手渡していきます。こうやってみんなで小さなビニールハウスを苗箱でいっぱいにしていきます。作業が終わるころには、みんなの顔はあせでいっぱいになります。おいしいお米を作ろうと一生けん命になっている顔は、すごくかっこいいです。みんな、この日のために、会社を休んでまで集まってくるのです。作業が終わって親せきみなでご飯を食べる時には、わたしも一緒になって、楽しくおしゃべりをします。親せきみなで話しながら食べていると、さっきのつかれがどこかに行ってしまう。それに親せきとの絆がますます深まって、「農家っていいな。」って思います。

もう一つ、わたしが好きなのは秋の収穫です。スポ少や習い事のない日は、おじいちゃんやおばあちゃんの手伝いをします。まず初めに、コンバインで刈れない所や田んぼの入り口の稲を、カマを使って手で刈っていきます。たおれている稲は起こして刈ります。力がある作業ですごく面どうです。刈った稲を両手で運ぶと、稲のかおりでいっぱいになります。わたしが運んだ稲は、おじいちゃんがコンバインに入れてくれます。とても危険な

作業なので、絶対にさせてくれません。これらの仕事は簡単に思うかも知れませんが、実際にやってみると、とても大変な作業なのです。わたしは時々しか手伝えないけど、おじいちゃんとおばあちゃんは秋の稲刈りの時期には毎日毎日やっているのです。雨が降りそうな時には、昼ご飯も食べないで作業を続けることもあるのです。がんばり屋で働き者の二人は、わたしの自慢です。

稲刈りをする時、わたしは「おいしいお米になるように」と願いをこめて、カマを使います。それはたぶん、おじいちゃんもおばあちゃんも同じでしょう。みんなの「おいしい、おいしい！」と食べる笑顔を見たいから、がんばっているんだろうなと、わたしはそう思います。だから、新米は、みんなの喜びと苦労と心がつまった、やさしい味がします。米作りは大変な作業の連続です。だけど、「いのち」を育てる農家に生まれ育ったわたしは、とつても幸せです。

■全国優秀賞・山形県知事賞■

祖母のひじきごはん

米沢市立第四中学校一年 松壽 大吾

ぼくの祖父は、福島で米を作っています。ぼくの家では、毎日祖父の作ってくれた米を食べています。今まで、一番おいしかったのは、祖母のひじきごはんです。

夏休みに福島の家遊びに行くと、いとこ達が十人集まります。ごはんもたくさん食べるので祖母はよくまぜごはんを作ってくれました。ひじき、ごぼう、にんじん、油あげを煮て、炊いたごはんを混ぜます。味がしみて、とてもおいしかったです。いとこ達がたくさんおかわりするのですが、一杯しか食べないぼくも、三杯おかわりしたこともあります。祖母が福島で作って米沢の家に持ってきてくれたこともあります。しかし、その祖母は五年前に病気で亡くなってしまいました。もうそのひじきごはんを食べることができないのでとても残念です。

祖母はいつも孫達のためにお米を作り、ごはんをたく

さん食べて大きくなってもらうのが楽しみだと言っていたそうです。父は田植えの時には手伝いに行っていました。ぼくはまだ小さかったので、祖母が生きている時に田植えの手伝いに行ったことがありません。残念です。だから、そのうち、父と一緒に祖父の手伝いに行きたいと思っていました。

ところが、昨年の三月に東日本大震災がありました。そして、そのあとに福島第一原発の事故です。祖父母の家は、原発から四十キロメートルのところにあります。一人で暮らしていた祖父は、避難指示がでた時に、郡山まで避難しました。ぼくは、もう祖父はもとの家に住めなくなるのか、祖父の作る米も食べられなくなるのか、とても心配でした。

しばらくして祖父は家に戻りましたが、原発から出た放射線が福島の地面に落ちて、農家は野菜や果物が作れなくなりました。祖父が放射線測定器を買って田んぼの土を測定してみると、やはり、放射線量がとても高かったそうです。

でも祖父はあきらめませんでした。昔、セメント工場です仕事をしていた祖父は、スリーマイル事故の時に、ゼ

オライトという鉱物が放射性物質を吸着させることを知っていたのだそうです。そこで、ゼオライトの粉を田んぼにまいて、いつも通りに田植えをしました。放射線が検出されてしまうかもしれないけれど、孫たちに食べさせる米を作り続けるという祖母の思いを、ずっと引き継いでいきたかったのだそうです。その話を聞いた時、ぼくは感謝の気持ちでいっぱいになりました。

昨年の収穫の後、農協で米の放射線量の検出が行われました。祖父の米からは、全く放射線物質が検出されませんでした。祖父が一生懸命作ってくれたおかげだと思えました。祖父は家が原発から四十キロメートルしかなかったけれど、近くにある大滝根山が放射線から守ってくれたのだと言っていました。でもぼくは、きっと天国にいる祖母が、ぼく達のために田んぼを守ってくれたのだと思っています。

祖母が生きていたらとても悲しかったであろう原発事故。でも祖父は皆のためにとても頑張ってくれました。ぼくは今年始めて田植えを手伝いに行きました。田植え機に積む苗を運ぶのがぼくの仕事です。田植え機の運転は祖父がしました。ぼくは苗を持って何度も田んぼを

往復しました。思った以上に大変な仕事でしたが、はじめて祖父の力になれたことがうれしかったです。

秋の収穫がとても楽しみです。その時とれた米でひじきごはんを自分の手で作ってみて食べたいと思います。祖母が作ってくれたようにおいしくはできないかもしれませんが、米を育ててくれた祖父にも食べてもらいたいです。そして祖母にも、毎日ごはんを食べて大きくなつたぼくを見てもらいたいと思います。



■山形県農業協同組合中央会会長賞■

命をつなぐ

米沢市立南原中学校二年 我妻隆太郎

家族に、お米といえば何が合うか尋ねると姉は納豆とお米パン、母は茄子漬けと唐揚げ、父はポテトサラダと日本酒、(僕は焼き肉と寿司)と答えが返ってきます。毎日当たり前のようにお腹一杯食べています。冷蔵庫には余ったお米と作り過ぎたおかずで溢れています。きっとこれが飽食の時代と言うのでしょう。食べ物が溢れる現在で僕は一年に一回、五月八日にしか口にできないものがあります。それは毎年祖母が持つてきてくれる日本一おいしい甘酒です。湯飲み茶碗の下に溜まったお米を人差し指で掬って食べるのが何とも楽しいです。小さい頃は五月八日のお釈迦様のお祭りに行っていたが、最近では忙しくてなかなか行く事は出来ていません。

祖母の家は昔、侍をしていて、寛政三年(千七百九十一年)に地域にある代官所からお釈迦様を守れと言う命

令を受けてからずっと祀られ、お釈迦祭を今現在まで続けています。お釈迦祭の甘酒振舞いは、お堂の中に入り参拝する人達に祖母が作った甘酒を振舞います。祖母の家の隣近所の方々も自分達の家で採れたお米を使って各家ごとの手作り甘酒を持つてきて振舞ってくれます。それぞれ、とろみや味の濃さ、お米の硬さ、甘さなどが違ってどれも美味しいです。飲んでいると温かい気持ちになってほっとします。これはきつとこの集落のお米を使った食文化なのだと思えます。

甘酒の作り方はまず、お米でゆるいお粥を炊き、人肌で冷まします。冷ましたら米麴を混ぜ、炬燵の一番低い温度で約七時間程度温度を保ちます。鍋でお湯を沸かし、作った甘酒の元を入れます。砂糖や塩で味を整えれば甘酒ができます。

どうして甘酒なのかと言うと、お釈迦様の誕生日に空から甘い雨が降り、お釈迦様の体を綺麗に洗い、清めたことから甘酒を振舞う様になったのだそうです。お釈迦様の誕生日より一カ月後にお祭りが行われる理由は祖母が暮らしている地域では雪がたくさん降るため一カ月延ばして行っています。昔は貧しく出産後の母親や子供に

も十分な栄養を与える事が出来ず、亡くなる子供も少な
くなくつたです。そこで安産の神としてお釈迦様をお祀
りし、赤ちゃんのために母親の母乳が出るように甘酒が
振舞われました。コンビニエンスストアに行けば、おに
ぎり、弁当、おやつが何でも揃う時代に生まれた僕に
とってはなんとも感慨深い話です。

約二千五百年前から米作りが始まったと言われるが、
祖先が江戸時代中期から稲作をしていると言うことを思
うと、お米にはその時代背景と歴史があるのだと強く思
いました。

子供を守ると言う心の絆を持った人達の中で、祖父母
がいて、両親がいて、命のつながりがあり、きつと僕が
生まれてきたのだと思います。学校の先生から食べ物
粗末にしないようにと言われていたが、余り意識をして
いなかった気がします。お米を作っている人、料理をし
てくれる人、そして食べている人の命の尊さを、今回祖
母と話をして知る事が出来ました。飽食の時代だからこ
そ、食事の前に言ういただきますの言葉と米一粒を噛み
締めることができるありがたさを大切にしていきたいと
思います。

